

豊明絵草子の作者について

——「とはすがたり」のと関連において——

岡 本 恭 子

一

白描絵巻「豊明絵草子」一巻は尊経閣文庫に所蔵されている。全体を五段の絵と六段からなる詞書を交互にまじえ、流動性をもたせた一巻ものとしてまとめられている。普通こうした形式のものを段落式と呼んでいるようだが、豊明絵草子には絵と詞書がかならずしも一組とはなっておらず、むしろ詞書で多く語っている点などが特徴といえよう。

詞書の内容は、身分ある男女を中心にした幸福な家庭から先ず妻の死を描き、無常を悟った夫は世俗の一切のものと訣別し、念仏三昧の生活によって、やがて仏の機縁を得て静かに浄土へ導かれてゆく、といった浄土を讃仰する色彩を濃厚にもっている。

絵は詞書に添って仕合せな家庭を詳細に描き、妻の死の情景、出家する父に涙の別れをする子供たち、庵室を尋ねた息子との対面まですを描くに留めている。

白描絵の中でも稀世のものといわれる豊明絵を、美術史上具体的に

な位置を求めることは難しい。すでにこの絵を取り上げ、文学作品との関連の上に考察された論文がある。それは中村義雄氏、つづいて中村氏の論に反対の立場を示される松本寧至氏のものである。いまそれらの論に耳を傾けながら、更に浅学の私見を加えさせていただき、文学と「豊明絵草子」の関わりあいを見ていきたいと考える。

二

豊明絵と関連をもって考察された文学作品に「とはすがたり」が取りあげられたのは、豊明絵の詞書の中の二十余りのことばと、「とはすがたり」五巻の中に点在することばとが同一もしくは類似があるという中村義雄氏のご指摘によったからである。それによつて中村氏の『同一作者と考える方が自然ではないか』①、松本氏は同一作者でなく『「とはすがたり」が「豊明絵草子」を冒頭から引用したと見る方が自然である』②とのご意見の存する理由となつたのである。そして私の結論も中村義雄氏と同じくするものであると

いうことを付加しておきたい。

それではなぜ「同一作者」と見るのか、順を追って考えてみよう。そのため先ず類似句なるものを示す必要がある。

豊明絵草子③

とはずがたり④

第一段

(1) 豊明のよなくは淵酔舞樂に袖をつらねてあまたとし 臨時調樂のおりくはおみのころもにたちなれて 見たらし河にかけをうつす

とよのあかりのよなくはゑんすいふかくに袖をつらねてあまたし りむしてうらくのおりおりはをみの衣にたちなれてみたらし河にかけをうつす

(1~217) ⑤

(2) 天子に心をかけ禁中にましらはせんことを思かしつかせける人のむすめをえたり

てんしに心をかけきん中にましらはせんことをおもひ かしつくよしきくも (2~279)

(3) 公事につかふるおりく

公しにつかうるに物うからす (1~217)

(4) 人間に生をうけたれとも

人間に生をうけて (1~213)

(5) 有為無常のなさけなきことはりをしらす

ういむしやうのなさけなきならひと申ながら (5~383)

(6) かたみにいまたいはけなかりしよはひのほとよりあひとも

いはけなかりし御ほとよりかたみにをわかならぬ御ことにおもひまいらせ (3~286)

第二段

(7) やまふのゆかにふしたり

やまひのゆかにふして (4~330)

(8) 陰陽医療の道々はもるゝすくなく

をんやういたうのもるゝはなく (4~330)

(9) 家につたへたる宝物世にきてえたる名馬とも霊仏霊社へたてまつれり

いえにつたへたるたからよにきこえある名馬までれいしやれいふつにたてまつる (4~330)

(10) 日かすはつれどもしるしなし

あまた日かすはつれども (4~330)

第三段

(11) 三種の愛に心をとめて懺悔のおもひにひるかへらす知識すゝむるにたよりをうしなひ教化の詞にみちをまとへり

三しゆの愛に心をとめてきんげのこと葉に道をまとはしてついにけうけのこと葉にひるかへし給ふ御けしきもなくて (1~216)

第四段

(12) 霓裳羽衣の舞たとへとするにあかさりしすかた

けいしやうういの舞の姿とかやきくもなつかし (5~362)

(13) 三界無妄猶如火宅一夜のとまるへき心地せず

三かいむあむゆめの火こく一夜とまるへき身にしあらぬ (4~353)

(14) 五旬をすくすへきよしをいふ

五しゆんすきなほまいるへき (1~226)

第五段

(15) かの墳墓のかたはらにあむしちをむすひて心をしつめて念仏す

松山いたくほからぬほとにちいさき庵室をたつねいたして道場にきたためせんほ正さむ花などは

(16) 松嵐のこゑはげしければやうやく生死の夢おとろきぬへし

しむ (5) 365)
みねのあらしのはげしきにもほんなうのねさめとおとろかすかときこゑ (4) 330)

(17) 生をかへたらむ心地すれは

生をかへたる心ちすれとも

(4) 330)

(18) ひとり思ひつゝくれはあはれ

うしろの山にやさるのこゑのきこゆるもはらわたをたつ心ちして心のうちの物かなしさもたゝいまはしめたるやうにおもひつつけられてひとりおもひひとりななく (4) 328)

おりふし

前後さういのわかれあいへちりくのかなしみたゝ身一つにとゝまる (1) 239)

(19) めのまへのかなしみつたへき

くなくきは厭離穢土の境界は身一にきはまりたり

第六段

(20) つらつらいにしへをかへりみ

つらくいにしへをかへりみれは (4) 335)

以上を見較べると、豊明絵の方が漢字を多く用い簡潔に言い表わしているが、それによって豊明絵は男性の作であると即断することはさげねばならないと思う。なぜならば、主題の異なる作品であること、つまり一口に言って豊明絵は浄土讃仰するという点にあり、「とはすがたり」は作者の内面性を自照するという点を考慮するからである。

いずれをみても仏典や漢詩を深く理解し、すでに自分のことばとして使用するという美事さは認めねばならないであろう。ここで一つ考えられることは、この類似句を引き出させた別本があったのかということである。同一作者云々という問題は別として、一般的にみて主題の異なる作品に同じ表現をするということはありえず、結局は両作品における関係として見るべきであろう。そして、同じ表現をするということはどちらかが一方より影響を受けたか、あるいは同一作者であるということになるのである。それについて松本氏の説を要約すると次のようになる。

(1) 『とはすがたり』が『豊明絵草子』に影響を与へた場合。

(2) 『豊明絵草子』が『とはすがたり』に影響を与へた場合。

(3) 共通の源泉から同時的影響関係にある場合。

(4) 右のいづれにも相当しない場合。この場合は同一人となる。

先ず(3)はありえないとされる。そして長篇「とはすがたり」の中から広範囲にわたって少しづつ抜き出し一書を作ったのはなぜなのか理由を推測するのは困難である。両作品の内容を比較してみると、豊明絵は『人生の無常を説いて念仏を勧める、という極めて単純明解なものである』のに、「とはすがたり」の方は『波瀾万丈でその主題、構想は複雑多岐である』と述べられる。更に「とはすがたり」を読んだ上で『この作品を作ったならば、もっと豊かな内容の作品になってゐたであろう』と附言され、故に(1)の場合には成立しない論述されるのである。そして(2)と(4)を考え合わせられて『まづ対照表(1)「豊明のよなく云々」のやうに、また(2)(1)のやうに全く同文であることは、どうも同一作者のものとは思へない』といわれ

る。更に同一作者が『本質的には全く傾向の違った作品に、再度同じ文句を使用するであろうか、むしろその逆ではないだろうか』と疑問を投げかけられて、『同一作者でも別個の作品を書く場合、多少に拘らず新しい表現を試みようとするのが、作家本来の態度ではなからうか』と、ゆえに同一作者否定とされたのである。

また浄土思想からみて、複雑多岐な「とはすがたり」の『作者の頭脳を通して』、単純明解な豊明絵のような作品が生まれるとは考えられないし、豊明絵の方には『明確に浄土往生思想が出てゐるが「とはすがたり」ではさうではない。どちらが進んだ境地かといへば豊明絵草子の方が、「とはすがたり」作者がこの作品を完成するのは、作者の人生の完成、それは即ち文学即仏道修行の完成をも意味してゐるのであって』、わざわざ豊明絵のような作品を『創作する必要はない』と述べられる。そして更に他の作品の例を挙げながら『「とはすがたり」が「豊明絵草子」を冒頭から引用したと見る方が、その方法からしても自然なのである云々』と、きめ細かく論述されたのである。

おいおいに私見を呈することで先へすゝみたいのであるが、ここで松本氏の論に立って、もし同一作者であったのなら、というもう一つの疑問をもつとしよう。それは同一作者が主題の違う作品を書くとき、簡潔と優長の別が生じるはずであり、一方は長篇物語であり、いま一つは絵が作品の半分の生命を担っているという違いを考へれば怪しむに足りないはずだと私は思うのである。また同一作者なら新しい表現を試みる云々ということは第三者的な考え方ではなからうか。慣用句もあろう、本人の癖もあろう、しかし、それより

も第三者には介入できない作者のことばがあると考えるのである。

三

豊明絵の主題となるものは何か。それは往生念仏である。作者は臨終にのぞんでの念仏利益を対照的な二人の往生者を描くことによって示している。しかし、果して臨終念仏の利益を説くだけのものではなからうか。単に念仏をすゝめるといふだけのことなのだろうか。それが私の提示したい問題である。

先ず妻の死において『法術のちからつきて命刹那につゝまる時』、枕辺の善知識から六字の名号をすゝめられても『口にとなるに物うくみゝにきくことかすか』であったという。いくら浄土の莊嚴さを説いても、ただ『三種の愛に心をとめて懺悔のおもひにひるかへら』なかつたのである。そのさまは善知識も浄土への信仰をすすめるすべを失うほどであったという。いろいろなため『心をはげまして』やと『十念は具足』したので、夫は妻の往生が『罪五逆にいたらざりしかはいはむや見金蓮花猶如日輪の説虚妄ならされは』、きつと『下品三生』の蓮台に乗ったであろうよと語るのである。この夫は、最愛の妻の死に涙するというよりも冷静に死を受け止め、妻の態度に往生をあやぶみ、おそらくは僧の声に合わせて念仏をしたであろうと思われるほど、ただ一途に妻の往生を念ずるのである。これも裏を返せば夫婦愛のあらわれであろうが、この作品はラブ・ストーリーではないので愛に結びつけて考える必要はなからう。夫が善知識と同じ立場から愛妻の死を見つめることに意味があるはずだ。

「とはずがたり」の中で作者は、後嵯峨院の死と作者の父雅忠の死に触れている。

後嵯峨院の枕辺に二人の高僧が侍り『今生にて十善の床を踏んで百官にいつかれましませば、黄泉途、未来も頼みあり、早く上品上生の台に移りましゝて云々』⑥といろいろ申し上げ『かつは教化』申したが『三種の愛に心を留め懺悔のことはに道を迷はして終に教化のことはにひるかへし給う御氣色なくて』崩御されたと記し、それについて作者は果して上品の蓮台に乘られたか、かならずや往生されたに違いない等の疑問の言葉を一言も発していない。それは作者が、偶然にその場に居合せただけで疑問を抱くほど作者の心に浄土往生思想が熟していなかったということではない。言つてはならないということを作作者は承知していただけのことであり、それよりも作者にとっては、後嵯峨院の死に殉ずるようにして死んだ父雅忠の方がより重大事であったはずである。

すでに時きたれりと自ら悟つた雅忠は『聖呼びにつかはせ』と命ずる。そして『頂剃り五戒受けて、れんせう』と法名を受け、ついで善知識をもと希望するが、妻が別の僧を呼んでしまったのでそれに従う。重態ではあったが今すぐ息を引きとるということもなかったのに、やがて『すでにと覚ゆるに起せ』と命じた雅忠は、床の上に坐つて『聖の賜びたりし袈裟は』と求める。そして『袈裟かけて念仏』をはじめたのである。雅忠の体が眠っているのか『左に傾くやうに見ゆるを、なおよく驚かして念仏申させ奉らん』と考えた作者が、父の膝をたゝいた為に『きと驚きて眼を見開くるにあやまたず見あはせられたれば、何とならんずらむは』と言ひも果てず』に

亡くなつたと記している。作者の嘆きは先ず『念仏のまゝにて終らましかば、行末も頼もしかるべきに、よしなく驚かしてあらぬ言の葉にて息絶えぬるも心憂く』と、後悔することからはじまつたのである。雅忠の往生は『三種の愛に心を留め』るところか、作者へ『世に棲む力なくば急ぎて真の道に入りて、我の後生をも助かり、二つの親の恩をも送り一つの蓮の縁と祈るべし云々』を諄々と説きいま見たような冷静な態度で臨終を迎えているのである。

「とはずがたり」作者が臨終者を見つめ筆を執っているのはこの二箇所だけである。そして先きの後嵯峨院と対照的に書いている。これは作者の意図によるものとは考えられない。後嵯峨院のようなあるいは豊明絵の妻のような臨終者の方が普通ではなかつたと思う。実際問題として、半ば意識を失いかけている者が『十念を具足』するということは容易なことではない。極悪人はどうしても十遍の念仏を唱えなければならぬが、その他の人は、一念でもよいと、源信は「往生要集」に述べる。要するに最後の決定的瞬間が善悪の分れみちになるという考え方から、源信が最底線の救済方法を示したに違いない。

こうしてみると雅忠の態度はりっぱであつたが、最後の一念を作作者が妨げたとあつては悔るのも当然であろう。この悔は父の遺言と重なり、作者の内に根を置くことになる。のちに、愛欲の世界に己れを委ねようとも、常に反省をとまなうのである。

「とはずがたり」作者が二つの死を記述したのは、単なる事実の記録だけのためではない。後嵯峨院の死が父の死へと導き、父の死が己れの人生に影響を与えたという連鎖を示すものであり、そのこ

とが作者にとって重大な意味をもたらすことになるからである。即ち、作者を尼にし『修行の志も（中略）その思ひを空しくなきじばかりに、かような徒言を続け置き侍るこそ云々』と、とはずがたり作者を導き出すことになるからである。しかしここで作者の修行の完成を認めることと、作者が「とはずがたり」以外の作品を書く必然性云々の問題とは別であることを付け加えておきたい。

さて豊明絵のもう一人の往生者に戻ると、妻の死を境に人生の無常を感じた夫は、余すことなく懺悔し『六字の名号にすきたるはなし』と言い、『身は愚鈍の凡夫なりといへとも今は念仏の行者たり』と自信をもって断言する。『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とこゑをはけまして』、ついに白毫観想のうちに往生を遂げるのである。先きに妻も救われ、そしていま夫も救われた、作者はそれだけのことを言うために書いたのだろうか。「とはずがたり」でみたように、ここでも妻の死というものがなかったら、また妻の臨終念仏のさまを経験しなかったら、夫は無常を感じることもなく念仏者として生きることもなかった。しかし、妻の死が夫の人生に影響を与えてしまった。『いまさらすてける世もうれしく』と言い、『今は念仏の行者たり』と、自ら選んだ生き方に自信をもっていい切る夫の姿を見失ってしまったのは、なぜ往生念仏をすゝめるのか、作者の真意を見逃がしてしまうことになる。

ゆえに私は、この豊明絵が単なる往生念仏の利益を説くためにまた念仏布教の一助とするために創られたものではない、ということを書いたかったのである。

四

豊明絵が、浄土信仰へ帰依をすすめるために、しかも女人を対象としたのではないか。そのために女性このみの表現によって絵画の上でひきつけたのではないかという説⑦もある。前項で述べたように、念仏布教の絵解きに使うために創作されたのではないといういま一つの理由に、絵の描き方を挙げておきたい。絵についての詳細な研究は美術家におまかせするとして、ここでいう絵とはあくまで詞書との関連の上で捉えた絵ということである。

絵の内容については最初の項で簡単に触れたが、詞書の一段一段を詳細にあらわすことは以上のものを描いているのである。特に最初の絵は詞書が必要としないほど詳細な筆の運びがある。次に妻の病祈願のために差し出す財宝の数々、中でも馬は詞書に示す名馬を感じられないが、それでも省くことなく描いている。妻の臨終を知らせる方法に、家族や女房どもの泣く姿を配置している。そして出家を決意した父と子の涙の別れ、ここでは一段目のはなやかさはなく前段まで描いていた畳の縁の模様まで消し一層の哀れさを感じさせている。最後の絵は、庵室の父を訪ねた息子と語りあって涙する僧の姿がある。そしてこの一面の大半を風景の描写に費して終る。五段に分けられた絵は、五段からなる詞書を描いただけで終り、詞書六段目の絵は描かれていないのである。

豊明絵の作者も二つの往生を書いた。しかしそのどちらも視覚で捉えることはできない。『下品三生のうてなにはのそみをやとけぬらむかし』と、第三者として往生のさまを理解し、夫として願望す

るだけであつて事実を問うすべはない。だが理屈を超えて実際に「死」を凝視した。その「死」は、『下品三生のうてなに云々』と言葉を補うことによつて絵になる「死」であつた。しかし『白毫ほそくめぐりて云々』は、ことばのみ先行して絵を伴うことは難しい。『異香やうやく室にほひ』というその句も、白毫の光の美しさも絵に捉えることは不可能である。だが人が、誰もが知りたいのはこの往生の莊嚴なさまではなかつたらうか。理屈では知っている、言葉では理解できる、だが満足するためにはより具体的な説明を必要としたはずである。となると絵解きを使うことを目的としてこの絵は描かれたものであらうか。

六段目の詞書から想像すれば、仏像を前に正座し香を焚き花を供え合掌する僧の姿があり、たなびく雲間に来迎のさまが、といった図になる。作者の絵筆ならそれぐらいは描けたはずである。しかし作者は描かなかつた。作者の描いた絵は現実に見た、あるいは経験した情景にのみ筆を留めているのである。その理由は『いまさらすてける世もうれしく』、『今は念仏の行者たり』と言ひ切る夫の、そこまでの姿を絵にすることで作者の目的は果たしたはずである。このことは前項の結論と一致する。即ちこの絵巻が他人の信仰を助けるために書かれたのではなく、作者の内省に根差したものであると見たのである。

五

妻の乗った蓮台が「下品三生」であるというその「下品三生」は「下品下生」の誤りではないかと松本氏は指摘される。

——原本そのものでなく、転写本ではないかと思はれるからである。例へは「下品下生」を「下品三生」などと誤るのも作者自身ではあり得ず、誤り方も当時の人らしくないからである。その理由に「観無量寿経」の「下品下生」の句に基いたからだと言明されている。

作者が『いはむや見金蓮花猶如日輪の説虚妄ならされはさためて下品三生のうてなにほそみをやとけぬらむかし』というのは、下品の人にはそれにふさわしいそれぞれの往生の本懐があるということではないだらうか。なお他に用例がないかと調べてみたら次のように見出したので挙げておきたい。

○下品三生無別階位。但是具縛造悪人也。明往生人其位有限。寧知猶是我等分耶。答。上品之人階位設深。下品三生豈非我等分耶。云々 (安養抄 卷二) ⑧

○往生要集(下巻)、右と同文を載せるが略す

○此経下輩撰九品中下品三生然此経中唯説發心第三業上品三生之因其第二業是中品三生云々 (極樂浄土九品往生義) ⑨

○中品三生の人は彼にて阿羅漢となる——又下品三生の人は彼にして花発くる時に無上菩提の心を発す。しかれば此世にて又発さぬ人なれば彼にては発すなるべし (菩提心集 下) ⑩

○あら／＼これをいはん。上品の三生は菩薩の位定れる人。中品の三生は声聞の善根を行ふ人。下品の三生は凡夫の罪人のすくはれたるなり (菩提心集 下)

以上、「下品三生」の部分のみを引用したため、全体の内容から汲み取りにくいかも知れないが大方の意味は理解できると思う。

珍海のことばを借りるならば『下品三生』とは『凡夫の罪人のすくはれたるなり』である。また浄土教に関する書物より、多くの浄土教家たちが如何に『下品三生』に想いをかけているか、念仏を最低の下品との対象において考えようとしているかを知ることによつても、この『下品三生』の使い方は誤りでないことがわかる。

豊明絵草子の絵の美しさ、一種の韻律をもった法語に惑わされ、「とはすがたり」の恋に目を奪われているうちに、作品の底を脈々と流れる地下水を汲みそこねたかも知れない。豊明絵草子は浄土教発展の途上にあつたことは確であり、それらを作者のことばとして書こうとしたことはすでに作者自身の土壌の豊さを示すものである。それを作者の信仰の証といつてもよいと思う。

この絵巻が、往生念仏をすすめるために描かれたと考えるにはあまりにも具体性に乏しいことをすでに述べた。「とはすがたり」作者が、かつて『西行が修行の記といふ絵』を見て感嘆したのは、何よりもそこに『西行』がいたからである。信仰とはそういうものではないだろうか。

二つの作品の主人公の人生が、自分の対象を失ったことから始まり到達するまでの過程を、一方はドラマチックな、一方は仏教思想を前面に出しながら描くという違いがあるけれども、その中に置かれた作家の姿勢は同一であることを認めるものである。そして『とはすがたり作者』の修行の完成の中に、この豊明絵草子も入れておかなければならないと思う。また作品完成の先後については決定的な論証をもたない。ただ時間的な隔たりはなかったと思う。その時間とは類似することばが、作者の中に鮮明にあるという時間である。

注

- ① 中村義雄氏 豊明絵草子と『とはすがたり』(美術研究 S 41・7)
- ② 松本寧至氏 『とはすがたり』の執筆時期について(富倉徳次郎博士古稀記念論文集)
- ③ 国会図書館 豊明絵草子 複製本
- ④ 書陵部伝本 「とはすがたり」(宮内庁)
- ⑤ この数字は富倉徳次郎著「とはすがたり」(筑摩書房(筑摩本とす)のページ数を示す)
- ⑥ これ以後の「とはすがたり」引用文は「筑摩本」のものなり、
- ⑦ 白畑よし氏 豊明絵草子(角川版、絵巻物全集17)
- ⑧ 智 光 大蔵経第八十四
- ⑨ 良 源 浄土教全集 下
- ⑩ 珍 海 浄土教全集 下

(大学院 学生)